

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 8 月 31 日現在

機関番号：23902

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H03177

研究課題名(和文)「月次祭礼図模本」の総合復元研究

研究課題名(英文) The General Reproduce Study of Copy After The Painting "Genre Scenes of The Twelve Months" (Tsukinami Sairei-zu Mohon)

研究代表者

岩永 てるみ (IWANAGA, Terumi)

愛知県立芸術大学・美術学部・准教授

研究者番号：80345347

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,260,000円

研究成果の概要(和文)：中世京都の祭礼が描かれた「月次祭礼図模本」(東京国立博物館蔵)は、室町時代に描かれた屏風を江戸時代に写したものである。失われてしまった原本の全貌がどのようなものであったかを探るため絵画技法・美術史・歴史の各分野から多角的に研究し、同時代の作品や資料を基に古典技法に則り描かれた当初の姿を再現した。この研究により心仁の乱前後の祇園祭をはじめとする祭礼や風俗についての考察が深まったと同時に、復元した「月次祭礼図屏風」は室町時代の大和絵屏風の全貌解明の足がかり的な屏風となるであろう。金箔小片を撒き潰したこの復元屏風は室町時代のたおやかで煌めく大和絵の世界感を私達に伝えるものとなるはずである。

研究成果の概要(英文)：[Tsukinami sairei-zu mohon] (Tokyo National Museum collection), depicting the festival held in Kyoto during the middle age, is the Edo period reproduction of a folding screen originally developed in the Muromachi period. To gain perspective of the original artifact, which is no longer available, we relied on a multifaceted approach including painting technique, art history, and historiography, referring to other art works and materials in the same period for preparing a reproduction according to the traditional method applied in the original piece. The study has allowed for a broad understanding of traditional festivals and customs such as Gion Matsuri held before and after the onin War (1467) and it is expected that the reproduced fold screen will pave the way for illuminating the overall structure and feature of Yamato-e paintings in the Muromachi period. Folding screen adorned with gold leaf pieces invite us to the glorious, fine touch of Yamamoto-e painting in those days.

研究分野：日本画再現研究

キーワード：復元研究 室町絵画 月次祭礼図 祇園祭 やまと絵屏風 金属箔

1. 研究開始当初の背景

中世京都の祭礼が描かれた「月次祭礼図模本」(東京国立博物館蔵)は、室町時代に描かれた屏風を江戸時代に写したものである。失われてしまった原本の全貌は明らかではないものの、祇園祭をはじめとする「京都」の様子を描いた最初期の絵画として、のちに流行する洛中洛外図への布石と捉えられることが多く、中世と近世を繋ぐ存在として注目されている(註1)。

さらに本図は応仁の乱(1467年)前後の祭礼風俗が大画面に丁寧に描写され、美術史的関心のみならず、祭礼やそれに関わる社会・風俗史の研究資料として価値を持つものである。しかし写しである本図は未彩色部分や金雲表現、欠損部分など芸術表現的な視点からは多くの疑問と課題が存在する。

2. 研究の目的

模本には「写し」という制約があり、画像本来の理解については不十分にならざるを得ず、本図が持つ情報を引き出す大きな妨げとなっている。特に表現に関わる問題は、原本図像を喪失している以上模本に頼るほかなく、類似本からの表現の想像には限界があり復元的な考察は不可欠である。そこで模本を多角的に検証できる研究組織を整え、本来の図像を再現することによって、原本図像が持っていた美術史的価値の回復をもたらすとともに、美術史・技法・歴史の各分野からの更なる研究促進を図りたい。

3. 研究の方法

技法・美術史・歴史各分野からの研究成果を持ち寄る総合研究によって、より妥当性の高い復元図の制作と絵画分析を行う。技法分野では彩色技法と金雲、美術史分野では同時代類似作例の比較研究、歴史分野では祭礼や行事についての時代考証を進めて、定期的な研究会開催によって成果を統合しながら、復元図案について検討を重ねる。各分野の研究成果を反映させた復元案を基に、線描、彩色、金銀装飾を全て伝統的な日本画材料によって再現描写し復元図を完成させる。

4. 研究成果

(1) 屏風としての「月次祭礼図」

原本の調査

「月次祭礼図模本」の原本調査を、瀬谷愛氏(東京国立博物館)の計らいによって平成27年11月17日に東京国立博物館で実施した。模本は現在、六幅の掛け軸になって保管されている。両端にあたる第一幅と第六幅は、絵画相当部分の横幅が短くなっていることもあり、屏風における大縁が想定されることから当初の「月次祭礼図」は屏風装であったことが判る。以降本報告において、当初は屏風だったことを鑑みて表記を「幅」ではなく「扇」とする。また「月次祭礼図模本」は「模本」、室町時代に描かれた当初原本を「原本」と呼ぶ。

熟覧によって、彩色まで施されている扇(主に第二、三、五扇)の描き込みは緻密で原本を彷彿とさせること、破線による素槍霞と金雲表現が散見されること、三、四、五扇に人物描写が欠損すること、模本の着彩は原本の様子に合わせて染料の使い分けがあることなどが確認された。また第二扇の注記「サ>六シワウノクニテハスジ」は、先行研究とは異なり「笹緑、石黄/藤黄の具にて葉筋」と読んだ。

寸法の検討

採寸した模本の大きさを基に、原本の絵画寸法を割り出す。模本に紙継ぎの表記はないが、室町時代の屏風絵で多く用いられた雁皮紙を縦に継いだ本紙に描かれたことを前提条件とした。現存する同時代の屏風の紙継ぎ幅や数を割り出して検討した結果、東博「浜松図屏風」や「松図屏風」に見られる縦六枚継ぎ(最下段のみ短幅)のパターンが模本寸法に最も適した紙継ぎと判断した。中央四扇の幅を64.75cm、両端二扇を56.3cmとすると、模本寸法の横幅(259cm)と合致する。縦寸は上下を除く四紙を30.2cmとし、最上段をやや広く、最下段を狭くして177.3cmとなるようにした[図1]

図の誤差修正

原寸大にデータから引き延ばして印刷し、図像を検証した結果、特に一、二扇や二、三扇をまたいで描かれる建物の描写にずれがあることが確認された。その他の扇またぎの部分にも同様にずれがあるが、特に建物描写のずれは印象を大きく損ねるため、模本の写し崩れと判断して部分的に修正を加えている。上記の作業や実技的復元作業は、愛知県立芸術大学の実技分野研究者が担った。

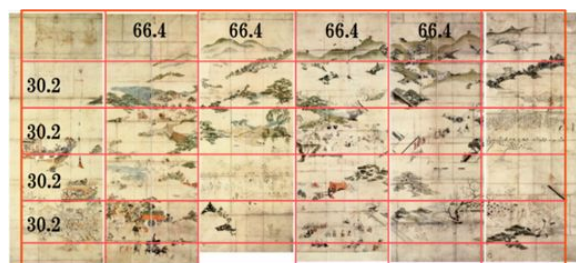


図1. 模本寸法の修正

(2) 参考作例の調査

土佐行広周辺作例

先行研究での指摘の通り、当初の原本は画風から土佐行広周辺の絵師の作という見解でほぼ一致している。土佐行広は15世紀前半に活躍し、足利義満、義持、三宝院満濟の肖像画を手掛けるなど、活動の場は將軍家に近いことが窺える。先行研究によって、模本に描かれた祭礼には戦国時代以降には見られない習わしがあることなどから、原本の景観年代が応仁の乱(1467年)より上ることが示唆されているが、土佐行広の活躍時期とも合致している。行広の世俗画の作例としては清凉寺本「融通念仏縁起絵巻」などがある。また「祭礼草子」、「浜松図屏風」も泉万里氏(大和文華館)によって画風が近いことが指摘されている。ほか同時代作例として「石山寺縁起絵巻」、「誉田宗廟縁起絵巻」、禅林寺本「融通念仏縁起絵巻」、画題の参考として「日吉山王・祇園祭礼図屏風」、「加茂祭礼絵巻模本」などが高岸輝氏(東京大学)、龍澤彩氏(金城学院大学)などから挙げられた。

復元研究では「祭礼草子」や「融通念仏縁起絵巻」両本を根本資料として、主に欠損の復元や文様、樹木の細密描写の参考にした。ほか粟田口隆光の関与が指摘される「石山寺縁起」や「誉田宗廟縁起」は風景描写や色彩感覚、祭礼風俗などは同画題作例を参照している。

東博「浜松図屏風」、「年中行事図屏風」の熟覧

画風が近い「浜松図屏風」と、原本を一部転写したとみられる「年中行事図屏風」の熟覧調査を瀬谷氏の計らいで実施した(前者平成27年11月27日、後者平成29年7月24日)。

「浜松図屏風」は人物描写も模本に近く、また金箔小片を撒き潰す手法は室町時代やまと絵屏風を象徴する表現でもある。雲霞表現も時代特有のものが見られるが、次項で詳述する。松や柳の描法や、縁蓋を用いた山の表現など、参考になる点が多い。

「年中行事図屏風」は新出の屏風で、熟覧当日に本田光子氏(愛知県立芸術大学)が所見をまとめた。17世紀に狩野益信によって描かれた屏風で、祇園会や的始めなど、一部に「月次祭礼図」の転写が見られるが、狩野派風の人物描写と中世風の人物描写が混在し、田沢裕賀氏(東京国立博物館)から原本を参照した点において疑義が出ている。写された祇園会周辺の描写には、模本にはない文様でびっしりと埋められており、復元の文様表現の方向性を伺わせた。

(3) 雲母地と雲霞

雲母地の塗布

室町時代のやまと絵屏風の特徴として、雲母地と金銀による金小片の撒き潰し表現が挙げられ、同時代文献で「金磨き付け」と呼ばれる表現技法が15~16世紀のある期間にだけ流行した。熟覧した「浜松図屏風」にも同じ表現が確認でき、他にかつて里見家本と呼ばれた東博の「浜松図屏風」、同じく東博の「日月四季花鳥図」、出光美術館の「四季花木図屏風」などの屏風に同様の表現が見られる。

雲母地は熟覧した「浜松図屏風」や、閲覧にとどまったが「四季花木図屏風」においても分厚い層が確認でき、それらを参考に模本復元でも雲母をたっぷり引いている。ただし、現代の雲母は機械粉碎によって粒子が細くなっており、同時代作例に比べると塗布した雲母の輝きは物足りない。

雲霞の諸問題 - 縁は是か非か -

模本復元の課題として、最後まで議論されたのが雲霞表現である。熟覧した「浜松図屏風」などの様子から、模本で描かれている雲霞は金箔を1.5mm角に裁断した小片を撒き潰したものと推測し、模本にも「地イツレモスナゴ(砂子)」と書き込みもあることから、雲霞に「磨き付け」を施すことは研究組織でも意見は一致した。室町時代の雲霞表現の特徴として、さらに「縁」のある金雲表現も挙げられる。金雲に括ったような縁があり、「浜松図屏風」の熟覧では縁に青、赤、白の三色が用いられていることも確認された。ただ、模本には金雲の描写はあっても縁の様子までは描かれておらず、果たして縁が原本にあったかどうかは議論を呼んだ。結論として、いわゆる「室町時代のやまと絵屏風」には縁のある金雲がほとんどの作例で確認できることから、復元でも縁を作ることとなった[図2]。

また雲母地に金箔の小片を撒くことも長く検討された。始めは金の使用量が増えると近世の表現に近づくことから地に金箔を撒くことは敬遠されたが、「浜松図屏風」の人物回りに密に撒かれていることや、復元画の彩色密度に対して雲母地の「空き」が目立ち、金を適度に撒くことで空間が埋められて人物描写が際立つこともあり、全面に金雲よりは透くように金箔小片を撒くこととした。金箔小片の作成は、山田真澄氏(京都造形芸術大学)の研究室の協力を得て総計1000枚以上の金箔と、100枚程度の銀箔を裁断した。

破線によって描かれた素槍霞の判断も、議論を重ねた。清凉寺本「融通念仏縁起絵巻」などに見られる水色の素槍霞での描写を試みていたが、室町時代やまと絵屏風諸本に見られるような銀の雲霞を加えた段階で、素槍霞にも銀色がふさわしいと判断して、始めは銀泥、のちに銀箔小片の撒き潰しに変更した。

さらなる検討課題として、「浜松図屏風」にみられる縁に塗布された青色や赤色が挙げられる。縁がある金雲も後世途絶えるが、金雲に色が附されることも縁起物の扇絵以外ではほぼ確認できない。まさに 15 世紀特有の雲霞表現にあたり、既述の「浜松図」や旧里見家本、「四季花木図」ではやはり色がある。ただし、いずれも「浜松」や「花鳥」をテーマとした屏風絵で、模本のような祭礼行事を現した同時代の屏風絵は存在しておらず、判断は難しい。復元の過程で、祭礼図の持つ祝祭的な志向と、過密な文様表現が織りなす濃彩表現にただ白だけの縁は浮いて見えることから、同時代屏風絵に倣い青色と赤色を附すこととなった。



図 2. 縁のある金雲試作 (CG)

(4) 欠損の復元

室町幕府

第一扇から二扇にまたいで室町幕府における的始めが大きく描かれるが、模本第一扇では傅く群臣たちにまったく色指定がなく、復元が必要である。射手と弓持ち等の構成をよく見ると、色が残る二扇側では射手一人に対して五、六人の橙色の装束を着た弓持ちが付随し、白い装束の武家が一人侍っていることが判る。その規則に従って一扇側をよく見ると、同様の構成で装束の色を想定できることが判った。

また描かれた御殿は従来から室町幕府とされてきたが、小島道裕氏（国立歴史民俗博物館）の詳細な検証によって、門に面した通りの塀が二重になっていることから、これが当時天皇や将軍家にしか認められていなかった「裏築地」の表現であること、稲荷神社とされた神社に鳩が二羽「八」の字型に描かれていて、位置的にも幕府に隣接する八幡社に見えることなどから、描かれた幕府は足利義持が将軍御所とした「三条坊門殿」であるとの推論が出ている。それに従うと、描かれた裏築地のある通りは万里小路となる。

松囃子

第一扇の下部には、正月の行事で幕府でも親しみがあつた「松囃子」が描かれているが、同じく模本には彩色がなく、一部描写も曖昧である。同時代資料の『看聞日記』に鶴亀舞が散見できることから、集団の一部は鶴と亀の扮装とした。中心の唐装束の一団は、馬を鹿に見立てていることから「寿老人」であるとの意見もあるが、模本に示された装束がいかに華美であり、演目不明ながら「皇帝」の仮装として復元した。

加茂祭礼行列

第三扇から五扇の計三扇をまたいで加茂祭礼行列が描かれる。行列の中心を現す肝心の第四扇の描写が省略的で、図像の復元が難しい。同時代の加茂祭礼行列の作例はないが、幸い江戸時代に文永期の祭礼行列絵を模写した絵巻が遺されており、天野信治氏（安城市教育委員会）や龍澤氏からの資料提供もあって、おおよそ模写絵巻の彩色傾向を検討できた。さらに「石山寺縁起絵巻」などの行列表現や牛車の色、牛の装身具などを参考にして復元を試みた。

祇園会

模本に示された祇園会は現存する最古の図様であり、乗牛風流や鶺鴒など、河内将芳氏（奈良大学）によって文献から読み取れる 15 世紀前半の特色を示唆された（註 2）。ただし文献からはうかがえない諫鼓鉦やとんがり帽子の囃子衆などの描写も確認できる。第六扇に描かれた鉦の胴掛けは前方にだけ虎が描かれているが、側面には描かれていない。後世の模本について西山剛氏（京都文化博物館）から資料提供があつたが、胴掛けは唐草紋が描かれており模本と一致せず、作例から判断がつけづらかったか、上杉本「洛中洛外図」や「日吉山王・祇園祭礼図」で見送りに虎をあしらう鉦や山が確認され、時代は下るが中世では飾りに虎皮が流行っていたであろうことから、復元では全面を虎とした。

自然景

季節に合わせて、模本からさまざまな樹木の描写が伺えるが、多くは省略されている。大きな樹木は「浜松図屏風」をはじめとした屏風絵から、中景、遠景の小さな樹木は「融通念仏縁起絵巻」をはじめとした絵巻から参照し、個々の描写の見直しを行っている。屏風全体の彩色の中で、最も緑青が鮮やかに見えるのが松葉だとの指摘を泉氏から、柳と松の幹表現に土佐派の特徴が現れる指摘を高岸氏から受け、色調や形の調整をしている。

(5) まとめ

これまでに述べてきた復元検証の積み重ねによって、「月次祭礼図」の原本の様子について〔図3〕のような復元画を制作した。縁のある金雲は、特に山際などの濃彩と重なる部分については縁蓋を用いて鋭い形態を出し、雲母地などとの接点は糊地にしてやや曖昧にするなど、縁の見せ方に強弱をつけている。縁の着彩は、あらかじめ雲母をさらに濃く塗り、あまり色が立ちすぎないように染料の藍や臙脂を用いた。金箔小片の撒き潰しは特に画面中央付近を漂う金雲の密度を増し、全体的に均一になりすぎないように工夫している。以上の措置は、熟覧した「浜松図屏風」から得た表現技法でもある。結果、金雲に金属箔を用いながらも空気感があり、15世紀のやまと絵屏風が持つ水蒸気的な雲霞表現を表出できた。

扇をまたぐ部分に大きな樹木（梅、松、柳）があり、模本の写し崩れもあって現状では欠損による隙間があったり、ずれがあったりするが、復元に当たってそれらを修正した。大きな樹木を丁寧に復元彩色することによって、一見孤立的に見える各祭礼行事が、巨大樹木がまたぐことによって屏風一隻の大画面に統一感を持たせて納まる効果があることが認識でき、意図的に配されたものであることが窺えた。

模本の人物描写は全体には省略的ではあるものの、第二扇や三扇などの描写は細密であり、絵具の濃度を覗けば十分に原本を彷彿とさせる。特に文様の描写は同時代作例のうちでも「石山寺縁起絵巻」よりは清涼寺や禅林寺の「融通念仏縁起絵巻」に近い。比較的大きな紋や片身代わり、小さな雲立涌、三目結などが多用され、融通念仏縁起と共通する。模本では文様が欠落している部分が多かったが、絵巻に倣って同じ密度となうように想定復元している。樹木や小さな人物でも、省略することなく執拗に描き上げることによって、ようやく中世やまと絵らしい表現に近づいた。

特に大きく描かれた祇園会は、本屏風の主題でもあったのだろう。天王台や鉾先からでは識別できない鉾、戦国時代以降の絵では方形になる山が円状になっていることなど、本図特有の表現が多く謎が残る。画面の切れ方から、おそらく存在したであろう左隻にも祇園会が描かれていたのではないかと想像させる。祇園会の詳細や小島氏から出された幕府の推論、画面中央に大きく描かれた御殿の所在など、表現以外にも歴史的、美術史的興味は尽きない。今後は平成30年秋に復元画の発表、31年度に報告書があるいは出版物の発刊を予定していて、それらをきっかけにさらなる議論を期したい。



図3．復元模写全図

註(1) 泉万里「中世の祭礼と寺社の記憶」月次祭礼図、『中世屏風絵研究』所収、中央公論美術出版、2013年、「月次祭礼図模本」についての主たる先行研究は本著を参照した。

(2) 河内将芳『祇園祭と戦国京都』、角川叢書、2007年、ほか参照。

5. 主な発表論文等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩永 てるみ (IWANAGA, Terumi)

愛知県立芸術大学・美術学部・准教授

研究者番号：80345347

(2) 研究分担者

北田 克己 (KITADA, Katsumi)

愛知県立芸術大学・美術学部・教授

研究者番号：50242251

- (3)研究分担者
阪野 智啓 (BANNO, Tomohiro)
愛知県立芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号： 00713679
- (4)研究分担者
本田 光子 (HONDA, Mitsuko)
愛知県立芸術大学・美術学部・講師
研究者番号： 80631126
- (5)研究分担者
河内 将芳 (KAWAUCHI, Masayoshi)
奈良大学・文学部・教授
研究者番号： 40340525
- (6)研究分担者
山田 真澄 (YAMADA, Masumi)
京都造形芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号： 60726454
- (7)研究分担者
龍澤 彩 (RYUSAWA, Aya)
金城学院大学・文学部・教授
研究者番号： 00342676
- (8)研究分担者
瀬谷 愛 (SEYA, Ai)
東京国立博物館・学芸研究部・研究員
研究者番号： 50555133
- (9)連携研究者
小島 道裕 (KOJIMA, Michihiro)
国立歴史民俗博物館・歴史研究系・教授
研究者番号： 90183805
- (10)連携研究者
中神 敬子 (NAKAGAMI, Keiko)
京都造形芸術大学・美術学部・非常勤講師
研究者番号： 10750474
- (11)連携研究者
安井 彩子 (YASUI, Ayako)
愛知県立芸術大学・美術学部・非常勤講師
研究者番号： 30750244
- (12)研究協力者
高岸 輝 (TAKAGISHI, Akira)
東京大学・大学院人文社会系研究科・文学部・准教授
- (13)研究協力者
天野 信治 (AMANO, Shinji)
安城市教育委員会・生涯学習課
- (14)研究協力者
西山 剛 (NISHIYAMA, Tsuyoshi)
京都文化博物館・学芸員